

ボーランド人とユダヤ人の共生の歴史から

板倉 千鶴

(一) 定義の問題

民族、あるいは文明という概念はいずれも捉え難い面を持つてゐる。そこでまず、定義の問題から始めたいと思う。「民族」について、ポーランドの歴史学者であるイエジー・トマシエフスキは次のように説明している。

「民族とは、歴史的に形成された伝統の共有意識をもち、基本的な文化上の共通の特徴を有する人間集団を指す……民族意識とは、外在する特徴ではなくて、人間の精神のなかでのみ生起し、維持され（時としては消滅したり、変容したりする）ものである」⁽¹⁾トマシエフスキの定義は、国籍、人種、宗教、言語、血縁性などの容観的基準には依らずに、もっと柔軟な解釈を与えている点に特徴がある。なぜなら、今挙げた国籍、人種、宗教、言語、血縁性といった基準のいずれをとっても、ボーランドの場合、統計

上の数値は異なつてくるからである。彼の定義の基準に置かれているものは、言い換えればある種の帰属意識であつて、人間の意識の所産である以上、それが流動的で可変性を持つものであることも認められている。

トマシエフスキの与えている民族の定義は、ボーランドという国の特殊性を反映した、非常に柔軟な定義ができると思う。この特殊性として、三点挙げておきたい。まず第一に、周知の通りボーランドは、十八世紀末の三国分割以来一九一八年の独立達成まで、およそ一二〇年間にわたり亡国の時代を送っている。この時代に、民族にとっての決定的要因となつたものは、国籍でも国境でも領土でもなく、民族としての意識、広い意味での文化であった。ボーランド国歌にも、「ボーランド未だ滅びず、我ら生きてある限り……」と歌われている。またボーランドは国境の変動の激しい国でもあった。⁽²⁾

第二に、ポーランドは、三国分割の時代から今日に至るまで、伝統的に移民と亡命の国であった。現在、ポーランドの人口は三八〇〇万を数えるが、これに対して在外ポーランド人は一〇〇〇万にのぼり、五人に一人は外国に住んでいるということができる。しかも移住先は、北米、西欧、旧ソ連、ブラジル、オーストラリア、イスラエルなど、広範にわたっている。こうした異郷に根を下ろした在外ポーランド人の民族意識の根底にあるものは、やはり先ほど挙げた客観的な基準で一義的に定義することはできないだろう。

第三に、ポーランドは戦後ほぼ单一民族国家と化したけれども、歴史的には、多民族・多宗教の国⁽³⁾であって、複数主義の伝統が根強く生きてきた国である。こうした伝統を再認識することによって国民的合意を達成した最近の例としては、例えば、連帯のグダンスクの合意（一九八〇）や円卓会議の合意（一九八九）等が挙げられるだろう。

そしてもう一つ指摘しておきたい点は、ポーランド語の *naród* という単語が、英語の *nation* と同じく、国民と民族のふたつの意味を表すことである。この他に *narodowość* という単語があるが、これは民族のみを指している。さらに、ポーランド人のアイデンティティーが問題にされるときにしばしば言及される概念として、*polskość* を挙げておかなければならない。この語は形容詞 *Polski* から派生した抽象名詞で、これまで、ポーランド

性、ポーランド人気質などと訳されてきたが、民族性よりもさまざまな解釈の余地を残した概念である。混迷の時代にポーランドの人々が繰り返したら戻つていった問いかけは、まさに「*polskość* とは何か」というものだった。

次に、「文明」という概念については、村上陽一郎氏の次のような定義が私にとっては説得力のあるものだった。

「『文明』とは文化の一形態であって、自然と他の諸文化の双方に対して攻撃的になり、自然を人為によって支配し管理すると同時に、周辺の個々の文化を自らの文化の形態に従つてブル・ドーザーのように均して支配する力を持ち、しかもそれを実行するに当たつて、様々な技術と社会機構や制度（そのなかには、法律、警察、教育なども含まれる）を用意するような文化を言う。……ヨーロッパ近代文明というのは、その最も典型的な事例である。そして、文明はそれ自身の持つ上に述べた特徴のゆえに、自ら崩壊の契機を孕んでいると考えられる。」⁽⁴⁾

ヨーロッパの周縁に位置する一小民族のポーランド人とヨーロッパの裏面史の主人公であったユダヤ人とは、まさにこうした文明のブル・ドーザー的な支配力に対しても均されることなく、文化によって抵抗し民族としての存続を可能にしてきた希有名であった。本稿では、ポーランド人とユダヤ人の共生の歴史を辿り、そこから民族と文明について学ぶべきことを考えてみたい。

(二) ユダヤ・ルネッサンスの存在とその盛衰をめぐつて

ユダヤ人とはボーランドでもっとも重要な役割をはたしてきた少数民族であつたが、もともと西欧から追われた民としてボーランドに受け入れられた存在であつた。

さまとよえる民、離散の民として知られるユダヤ人が、身を寄せた寄留地の文化と接触するその過程で開花させた幾つかのユダヤ・ルネッサンスを概観するとき、似通ったパターンが繰り返されているのだという印象を受ける。すなわち、ユダヤ人の間には、いつの時代にも、同化志向の強い層と保守的な正統派の層とが確執を繰り返しながら併存している。同化志向の強い層は宿主民族の文化と接触し、その文化衝撃を戦略的に克服しながら、ひとつユダヤ・ルネッサンスを生んでゆく。けれども、その結果はしばしば極めて悲劇的であり、時の権力の手で暴力的に踏み躡られてしまふ場合が多いといわなければならない。生き残ったユダヤ人は新たな寄留地とユダヤ・ルネッサンスの開花の場所を求めて、再び流浪を繰り返す。

このようにして、例えは、セファルディーと呼ばれるスペイン系ユダヤ人は、スペインの黄金時代にユダヤ・ルネッサンスを生んだが、それは一四九二年の異端審問によって痛ましく幕を閉じる。従つて、この同じ年、隠れユダヤ人のマラーノである可能性の高いとされるコロンブスが船出し新大陸を発見したことは、約束の土地の探索という象徴的な意味をももつてくる。(『希望の

帆』シモン・ヴィーゼンタール、一九九二)。「コロンブスの一家はイタリアのジェノヴァ在住のスペイン系ユダヤ人だった」歴史家サルバドール・デ・マダリガ(一九六〇年代)やがて、一九世紀のドイツを中心とする西欧では、アシュケナジと呼ばれるドイツ系ユダヤ人が、ハスカラというユダヤ啓蒙運動を提唱したモーゼス・メンデルスゾーンの後に続いて、ユダヤ・ルネッサンスを生んでいる。世紀末から第二次大戦にかけては、ロシア・東欧地域の東方ユダヤ人を主な担い手として、ロシア・ソヴィエト・ボーランド、さらにはドイツを中心とする西欧で、新たにユダヤ・ルネッサンスが開花している。しかし、この二つのルネッサンスもまた、スターリニズムとナチズムによってそれぞれ悲劇的な最期を迎えるに到つている。ちょうどその頃、第二の約束の土地と呼ばれた新大陸では、新たなユダヤ・ルネッサンスの開花の準備が進められていたが、その担い手となつた者は、一八八〇〜一九二〇年代のいわゆる「大移住」の時代に北米へと移住した二〜三百万人の東欧ユダヤ人の二世、三世だった。ボーランドのユダヤ・ルネッサンスもこうしたユダヤ・ルネッサンスのひとつに數えることができるが、それはボーランド人とユダヤ人の共生の所産でもあつた。

(三) ボーランドにおけるユダヤ・ルネッサンス

ユダヤ人が初めてボーランドに姿を見せたのは九〜一〇世紀のことだ、彼らは旅の商人だった。一一世紀初頭になると第一次十

字軍の宗教的迫害を逃れて、ユダヤ人の集団移住が始まり、それ以来、ユダヤ人の移民は増加の一途をたどっている。特に一四七五世紀にかけてカジミエシュ大王とズィグムント一世の時代には、国王が、国内にまだ生まれていなかつた中産階級育成策の一環として、ユダヤ人を受け入れ持權を付与する政策をとつたために、多数のユダヤ人が西欧からボーランドに流入している。⁽⁵⁾ 中世の西欧で、ユダヤ人が、「儀式殺人」「聖餅冒瀆」「井戸への毒投人」などといったお決まりの中傷を受けて迫害され放逐されたいたまさにその頃、ボーランドはヨーロッパで唯一、ユダヤ人に対し寛容な国であった。散発的な、小規模の迫害はあつたとはいへ、少なくとも一六四八年のウクライナ・コサック、ボグダン・フミエルニツキーの反乱前のボーランドは、ボグロムとは無縁であった。ちなみに、ユダヤ人の打ち壊しと集団虐殺を意味するこの「ボグロム」の語源はロシア語である。確かに、シユラフタと呼ばれる士族がユダヤ人に對し権利の制限を要求したり、あるいは教会がユダヤ人を敵対視することはあつたものの、二つの民族の共存状態は依然として続いており、ユダヤ人社会は「国家内の國家」とまで呼ばれたほどだった。

ところが、フミエルニツキーの反乱（一六四八～四九）と、それに引き続く異民族、異教徒との戦争のあげく、ボーランドが弱体化し無政府状態に陥ると、疲弊したユダヤ人社会の内部抗争が激化し、外部からは血の中傷と迫害に曝されることとなつた。やがて、一八世紀末、オーストリア、プロイセン、ロシアによる三

度の分割を経てボーランドは一二〇年にわたつて世界地図から姿を消すことになるが、この時、ユダヤ人もまた、土地とともに分割されてそれぞれの列強の支配下に置かれた。この間ユダヤ人は夥しい数のボーランドの農民大衆の間にあつて、都市の中産階級とプロレタリアートを構成し、独自の言語、風俗、習慣、宗教、文化のなかで暮らしていた。

さて、こうした独自の言語、風俗、習慣、宗教、文化のなかで暮らしていたユダヤ人が周辺社会の文化に参入してゆく契機となつたものは、東方ユダヤ人の場合、「ハスカラ」と呼ばれるユダヤ啓蒙運動であった。この運動の創始者、ドイツ系ユダヤ人モーゼス・メンデルスゾーン（一七二九～八六）は、合理主義に基づいて人間開放をめざしたヨーロッパの啓蒙思想とユダヤ思想の接点を模索しながら、具体的には、宿主民族の言語の普及や世俗教育の普及、政教分離を実践している。そうすることによつてユダヤ人は孤立状態から脱出し、平等を勝ちえることができ、またそれがユダヤ人社会の新たな復興にもつながると、彼は考えた。しかし、結果的に「ハスカラ」はユダヤ人の、周辺社会への同化の波を生むこととなり、この文化的同化は、一方では、すでに進展していたユダヤ人の經濟的同化によつて助長されるとともに、他方では、フランス革命後に余る曲折を経ながらも進展した解放運動の展開によつて促進された。ドイツに生まれたこの「ハスカラ」の運動は、一九世紀初頭のボーランドにも波及し、やがて同化の潮流を生んでゆく。

しかし、ポーランドの場合、「ハスカラ」の生んだ同化の潮流に先立つて、異端的なユダヤ神秘主義の「フランク派」が、同化の細い潮流を生んでいたことは、極めて重要な意味を持っている。この「フランク派」とは、一七世紀中葉の神秘主義的な異端ユダヤ宗派であるサバタイ派の流れをひく宗派で、正統的なユダヤ教の律法至上主義を批判するとともに、護教のためならば、カトリック教への改宗も厭わないと主張した。実際に、一七五九年、ルブフにおいてフランク派の数百人がカトリックに団体改宗している。貴族が宗徒の教父を努め、宗徒の多くは貴族の姓を譲り受け、貴族の称号まで手に入れている。彼らは、スペインのマラーノに似た隠れユダヤ教徒であって、改宗後もひそかに信者同志で結婚し、独自の宗派として一九世紀初頭まで存続したといわれている。

ポーランド・ロマン主義を代表する国民詩人として知られるアダム・ミツキエヴィチが、実はこの「フランク派」の流れをくむユダヤ系ポーランド人であるという説が有力であることを、すでに筆者は指摘している。⁽⁶⁾ そして日本でもミツキエヴィチユダヤ系説を既定の事実として扱う研究者が出てきている。ミツキエヴィチの文壇登場が一八二二年であることから、ミツキエヴィチはドイツのハイネと並んで、ヨーロッパの文壇にもつとも早く登場したユダヤ系作家ということになる。ポーランド文学史に最初に登場するユダヤ系作家の果たした役割が国民詩人であったという事実は、それに先立つ時代の両者の共生の歴史なしには生まれえない。また、作家とは民族のエトスを表現する存在と見做されて

いたロマン主義の時代を代表するこのミツキエヴィチが、リトニアを祖国とし、ユダヤの出自を持つ詩人であるという事実は、結果的に、多民族国家における国民詩人の概念そのものを問うことになる。つまりミツキエヴィチの時代のポーランドは国家無き多民族国家であって、その中でかつて「国家内の国家」とまで呼ばれた繁栄した民族の出自を持つものが「国民詩人」となったとしても不思議はないと思われるのだが。

三国分割下の亡国の時代、亡国の民という共通の命運が、おのずとポーランド人とユダヤ人とを結びつけてゆき、ポーランドのユダヤ人の間には「ポーランド志向」と名づけうる伝統が培われてゆく。例えばユダヤ人はポーランド人の愛国的な民族解放運動に積極的に参加している。一七九四年、タデウシュ・コシチュニシコによる蜂起への呼び掛けに応えて、ベレク・ヨセレヴィチ率いるユダヤ人部隊が蜂起に合流しているが、彼はまた、ポーランド国歌にも歌われているドンブロフスキ将軍麾下の「ポーランド軍団」の将校としても活躍し、その死は絵画にも描き残されている。一八六一年の反ロシアの愛国的デモには、ラビ・メイセルスを中心とするワルシャワのユダヤ人たちが参加している。さらにまた、第一次大戦下でユゼフ・ピウスツキが創設した「ボーランド軍団」のなかにも多数のユダヤ人が加わっていた。

一九世紀の文学の世界では、反ユダヤ的／汎ユダヤ的双方の描写がみられるが、ユダヤ人は概して好意的に描かれており、例えば、エリザ・オジェシコヴァのようにあたかも自分がユダヤ人で

あるかのようにユダヤ人を描いている作家も見受けられる。

さて、三国分割下において、正教のロシア、新教のプロイセン、オーストリアという、異民族、異教徒による支配は、一方で Po. Iak-Hatolik（ボーランド人＝カトリック教徒）と呼ばれる狭量な民族意識・ナショナリズムを生んだことも事実である。加えて一九世紀後半にはボーランド人の間にも中産階級が形成されており、ユダヤ人の中産階級との間に危険な競合関係が生まれ始めていた。加えて一九世紀末には、全ヨーロッパ的に偏狭な民族主義の高揚がみられ、その矛先はユダヤ人に向けられていた。ボーランドでも一八九三年には、ロマン・ドモフスキを中心として「国民同盟」が設立され、ナショナリズムと反ユダヤ主義の組織化が始まった。こうした敵対的な動きに対抗するかのように、ユダヤ人社会のなかにはさまざまな潮流が生まれてゆく。依然として統一していた同化の潮流と並んで、主として合衆国へとむかう大規模な移民の潮流が生まれ、さらには一九八七年に、各民族国家のなかでユダヤ人の自治獲得を求めるユダヤ人の社会主義組織ブンドが結成され、時を同じくしてバレスチナにユダヤ人国家建設をめざすユダヤ民族主義、シオニズムの運動が展開されるなど、まさにユダヤ人社会は激動の時代を迎える。

戦間期のボーランド政界では、一九世紀のナショナリズムの伝統をひくロマン・ドモフスキ率いる保守派と、愛国主義と独立運動の伝統をひくユゼフ・ピウスツキ率いる左翼とが、二大勢力をなし、せめぎ合っていた。前者がカトリック教会と連携し少数民族

族に対しては排他的であったのに対し、後者は民族主義・連邦主義・宗教上の寛容を標榜していた。

こうした中において独立達成後の第二共和制のボーランドにおいてユダヤ人の置かれた状況は極めて逆説的だった。ユダヤ人は政治、経済、文化のあらゆる領域で顕著な役割を演じるようになるが、この過程は、反ユダヤ主義の増大と軌を一にして進展した。独立達成の悲願が叶うと、ユダヤ人は今度は競争相手として危険視されるようになる。法律的には宗教・民族上の平等を保証されるが、ユダヤ人は社会的にはもつとも迫害された民族で、ボグロムも頻発している。

二〇世紀の激動の時代には、数多くのユダヤ系芸術家が輩出し、彼らの存在無くしては、ボーランド文化を語ることはできないといつても過言ではない。参考までに、ここでは日本で比較的知られている人名を幾つか挙げるに留めておく。作家で画家でもあるブルーノ・シュルツ、作家で教育者でもあるヤヌーシ・コルチヤック、同じく作家のブルーノ・ヤセンスキ（ヤシェンスキ）、アイザック・シンガー、ピアニスト、アルトゥル・ルビンシュタイン、エスペラント語の創始者ルドヴィク・ザメンホフ、演劇人タデウシュ・カントル、ヘンリック・トマシエフスキ、映画人口マン・ボランスキ、アンジェイ・ジュワフスキ、アグニエシカ・ホラント。

(四) 第二次大戦下のナチスによるユダヤ人殲滅

(五) 摂索の時を迎える現在のボーランド

ポーランド人とユダヤ人の共生の歴史から

ナチスによるユダヤ人虐殺は、ユダヤ人の同化と共生を志す試みに対する否定的な回答であり、ユダヤ社会の因習的側面を批判しその開明を意図した「ハスカラ」に始まる近代ユダヤ人の歴史に、歪められた文明の側から暴力的に終止符を打つ行為であった。かつて「ユダヤ」天国と呼ばれたボーランドが、アウシュヴィッツ（ボーランド名、オシフェンチム）に象徴されるホロコーストの主な舞台に選ばれたことは、歴史の皮肉という他はない。中世には迷信が人をユダヤ人迫害に驅り立てたとすれば、二〇世紀の文明社会にあっては、ナチスが、人種学、民族学、医学、歴史学を総動員させて、ユダヤ人が「亜人間」であるかのような似非理論を構築し、極めて功利的発想のもと、組織的かつ効率的に絶滅政策を遂行している。その結果、戦前およそ三五〇万人を数えたボーランドのユダヤ人口は、戦後およそ三七万人に激減し、ボーランドのユダヤ人社会とその文化とは測り知れない打撃を被った。一方、戦争によるボーランド人の犠牲は人口の五人に一人に達していた。ナチに加担してユダヤ人を排斥したボーランドの存在が戦後の両者の関係にしこりを残したことは事実だが、それと共に、数万人のボーランド人が命がけでユダヤ人を救つたことも銘記しておかなければならぬ。

ナチスによるユダヤ人虐殺は、ユダヤ人の同化と共生を志す試みに対する否定的な回答であり、ユダヤ社会の因習的側面を批判しその開明を意図した「ハスカラ」に始まる近代ユダヤ人の歴史に、歪められた文明の側から暴力的に終止符を打つ行為であった。かつて「ユダヤ」天国と呼ばれたボーランドが、アウシュヴィッツ（ボーランド名、オシフェンチム）に象徴されるホロコーストの主な舞台に選ばれたことは、歴史の皮肉という他はない。中世には迷信が人をユダヤ人迫害に驅り立てたとすれば、二〇世紀の文明社会にあっては、ナチスが、人種学、民族学、医学、歴史学を総動員させて、ユダヤ人が「亜人間」であるかのような似非理論を構築し、極めて功利的発想のもと、組織的かつ効率的に絶滅政策を遂行している。その結果、戦前およそ三五〇万人を数えたボーランドのユダヤ人口は、戦後およそ三七万人に激減し、ボーランドのユダヤ人社会とその文化とは測り知れない打撃を被った。一方、戦争によるボーランド人の犠牲は人口の五人に一人に達していた。ナチに加担してユダヤ人を排斥したボーランドの存在が戦後の両者の関係にしこりを残したことは事実だが、それと共に、数万人のボーランド人が命がけでユダヤ人を救つたことも銘記しておかなければならぬ。

戦後の社会不安のなかでユダヤ人はスケープゴートにされ、国外脱出の波が続いた。社会主義政権下では、ソ連ゆずりの政府主導型の反ユダヤ主義のもとで、ユダヤ人は寄留地の国益に対する配慮を欠いた「根無し草のコスマボリタン」として批判され、特に六八年の三月事件後は反ユダヤ主義の波が高まり、多くのユダヤ人が国外への亡命を余儀なくされた。その結果、国内にとどまつたユダヤ人の数はわずか一万二千〜二万人といわれ、ボーランドのユダヤ人社会と文化は壊滅的な打撃を受けた。

東欧革命後五年を経過した現在のボーランドの状況は、経済的には比較的安定し始めているが、規模は小さいとはいえ、西欧と同様に排外主義やネオナチの不穏な動きがみられ、また、九〇年の大統領選挙のように反ユダヤ主義が政治的に利用されたことも事実である。その一方で、忽然として姿を消したユダヤ人に対する郷愁の念を背景として、八〇年代前半から一種のユダヤブームが生まれている。九〇年には二三年ぶりにイスラエルとの国交も回復し、ユダヤ文化は再び活況を呈しつつある。現在、新しい状況のなかで、ボーランド人とユダヤ人とは、互いの民族的特質を尊重しつつ、新たな共生の道を模索しようとしているようと思われる。

(六) 結論

離散の民という境遇それ 자체がユダヤ人に境界上に生きることを強いる結果になる。言語、宗教、風俗、文化の境界上に。ユダヤ人が同化の途上にあった近代という時代にあってはなおさらだつた。しかし、境界上に生きることは越境の志向を生み、脱領域の知性を育み、ユダヤ人にとっては極めて生産的な状況が醸成されることとなつた。

ヨーロッパの周縁に置かれた東欧地域に位置するボーランドは、全盛期は別として確かに、政治経済上は弱小国家ではあつたが、常に文化大家であり続けている。そのような国家を寄留地としていることで、ユダヤ人の大きな貢献が可能になつたと言うことができる。

民族問題の五つのパターンとして、山内昌之氏は、①民族自決・分離独立問題、②国境・帰属変更問題、③少数民族・先住民間問題、④国民形成・国民統合問題、⑤移民・難民問題を挙げているが、それらはいずれもボーランド人とユダヤ人のそれそれが歴史のいすれかの段階で背負つてきただけの問題である。両者にとって試練を共有している点が相互理解を深めるための鍵となつてゐる。

冷戦終結後、ヨーロッパの統合が進展してゆく一方で、特に旧

ソ連・東欧地域を中心に民族の衝突・分離・独立が相次いでいる。こうした中でボーランドは、他の東欧諸国に比べれば民族問題は

それほど深刻な様相を呈してはいない。もちろん、すでに指摘したとおり戦後ボーランドがほぼ单一民族国家となつたという要因が決定的な理由となっているが、その他に、これまで述べてきたボーランド人とユダヤ人との、敵対しながらもまがりなりにも共生しつづけた千年の歴史に象徴されるよう、複数主義の伝統を持つ意義は大きいと思われる。

ボーランド人とユダヤ人の共生の歴史は、ヨーロッパの周縁に置かれた弱者の立場から、未曾有の惨禍を生んだ現代文明に対しても、道徳的なメッセージを発し続けているように思われる。

参考文献

坂倉千鶴　雑誌『現代思想』一九九三・五　青土社

山下肇　一九八〇『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究——ゲットーからヨーロッパへ——』有信堂高文社

一九八六　ボーランド・ユダヤ系作家群像(一)——アダム・ミツキエヴィチの謎——『西スラブ学論集』第一号　三七・五一頁

一九九二　「ボーランドのユダヤ人とユダヤ文学」もつと知りたいボーランド　弘文堂　二二三・二四八頁

西垣通

一九九四　『ペシミスティック・サイボーグ』　青土社
南光進一郎監訳　ベンノ・ミュラー＝ヒル著

一九九三) 『ポーランドの歴史 ナチの精神科医だらう』

東波龍臣

Czaplinski W., Ladogorski T.

1977 *Atlas Historyczny Polski*, Warszawa : PPWK

Gilbert M.

1978 *Jewish History Atlas*, London : Weiden-

feld and Nicolson

Piekarski A.

1979 *Freedom of conscience and religion in Poland*,

Warszawa : Interpress

Sandauer A.

1982 *O sytuacji pisarza polskiego pochodzenia ży-*

dowskiego w XX wieku, Warszawa : Czytelnik

Tomaszewski J.

1985 Ojczyzna nie tylko Polaków, Warszawa :

Młodzieżowa Agencja Wydawnicza

1991 *Mniejszości narodowe w Polsce XX wieku*,

Warszawa : EDITIONS SPOTKANIA

Wozniakowski J.

1980 Le pluralisme en pologne, hier et aujourd'

hui, *Les quatre fleuves. Cahiers de recherche et
réflexionne ligieuse* 13, Pologne et Russie, 1 Pologne
/ pp. 29-36

註

- (一) Tomaszewski J. /1991/ ibd. pp. 7-8
(二) Czaplinski W., Ladogorski T. /1977/ ibd. p. 54 (圖)

史地図挿入)

(3) ポーランドの社会構成 ステファン・キリル・ガバチ

一九八六 前掲書一 三五一頁

一七九一年 ショラフタ 八・〇%、聖職者 ○・五%、都

市住民 七・〇%、ユダヤ人 一〇・〇%、農

民七・一・〇%、その他(トルマニア人、ターチル人、正教徒)二・五%、あた、すべての農民と、ユダヤ人以外の都市住民の半数を構成していたのは、ウクライナ人、クロロシタ人、リトアニア人だつた。

4. ポーランドの民族構成 Tomaszewski J. /1991/ibd.

p. 23, p. 45

一九四一年 ポーランド人 千四〇%、ウクライナ人 一千九〇%

ユダヤ人 一〇%、クロロシタ人 七%、ドイツ人 一%、リトアニア人 一%、ロシア人 一%

ポーランド人 九七・五%、ドイツ人 ○・七%、ウクライナ人、クロロシア人 各○・六%

ユダヤ人 ○・一%、スロヴェニア人、ロシア人各○・一%

一九四五

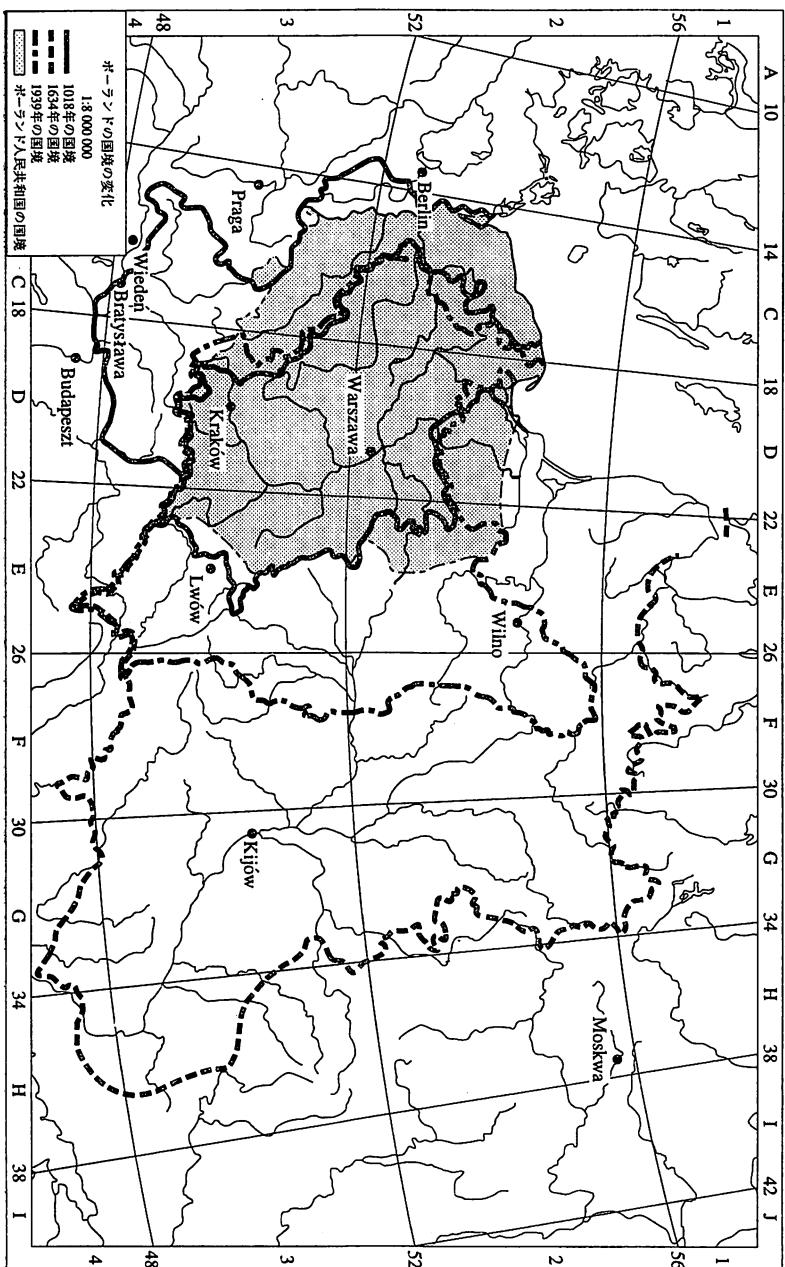
(4) 村上陽一郎 「近代文明とキリスト教」『現代思想』一

九九三 H 八頁

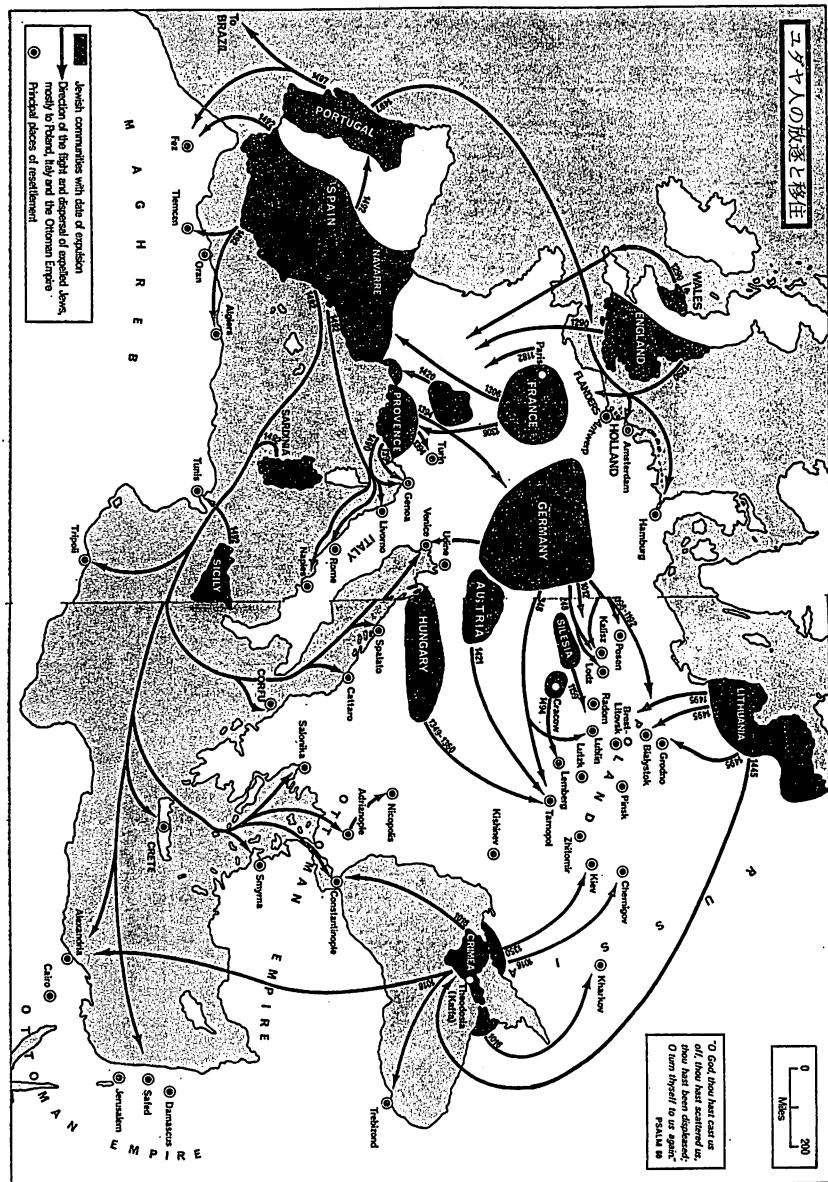
(5) Gilbert M. /1978/ ibd. pp. 45-46 (歴史地図挿入)

(6) 坂倉千鶴 一九八六 前掲論文

(7) Gilbert M. /1978/ ibd. p. 96 (歴史地図挿入)



ポーランド人とユダヤ人の共生の歴史から



ユダヤ人の抹殺

